

会館芸術 第Ⅲ期・戦後篇 全17巻

【監修】長木誠司／ヘルマン・ゴチェフスキ／前島志保

【編集・解説】朝日会館・会館芸術研究会

協力：朝日新聞厚生文化事業団 朝日新聞社

●揃定価：本体306,000円＋税 ISBN978-4-8433-5465-0 C3370 A5判・B5判／上製／クロス装／カバー

第一回配本・全9巻 揃定価：本体162,000円＋税 ISBN978-4-8433-5466-7 C3370 2019年5月刊行予定

●第25巻● 1945年（昭和20年）	解説：前島志保	定価：本体18,000円＋税	ISBN978-4-8433-5468-1
●第26巻● 1946年（昭和21年）1月～6月	解説：白井史人	定価：本体18,000円＋税	ISBN978-4-8433-5469-8
●第27巻● 1946年（昭和21年）7月～12月	解説：中尾 薫	定価：本体18,000円＋税	ISBN978-4-8433-5470-4
●第28巻● 1947年（昭和22年）1月～6月	解説：山本美紀	定価：本体18,000円＋税	ISBN978-4-8433-5471-1
●第29巻● 1947年（昭和22年）7月～12月	解説：山本美紀	定価：本体18,000円＋税	ISBN978-4-8433-5472-8
●第30巻● 1948年（昭和23年）1月～6月	解説：中村 仁	定価：本体18,000円＋税	ISBN978-4-8433-5473-5
●第31巻● 1948年（昭和23年）7月～12月	解説：中村 仁	定価：本体18,000円＋税	ISBN978-4-8433-5474-2
●第32巻● 1949年（昭和24年）1月～6月	解説：中村 仁	定価：本体18,000円＋税	ISBN978-4-8433-5475-9
●第33巻● 1949年（昭和24年）7月～12月	解説：中村 仁	定価：本体18,000円＋税	ISBN978-4-8433-5476-6

第二回配本・全8巻 揃定価：本体144,000円＋税 ISBN978-4-8433-5467-4 C3370 2019年9月刊行予定

●第34巻● 1950年（昭和25年）1月～6月	解説：岡野 宏	定価：本体18,000円＋税	ISBN978-4-8433-5477-3
●第35巻● 1950年（昭和25年）7月～1951年（昭和26年）1月	解説：岡野 宏	定価：本体18,000円＋税	ISBN978-4-8433-5478-0
●第36巻● 1951年（昭和26年）2月～6月	解説：山本美紀	定価：本体18,000円＋税	ISBN978-4-8433-5479-7
●第37巻● 1951年（昭和26年）7月～12月	解説：山本美紀	定価：本体18,000円＋税	ISBN978-4-8433-5480-3
●第38巻● 1952年（昭和27年）1月～6月	解説：中尾 薫	定価：本体18,000円＋税	ISBN978-4-8433-5481-0
●第39巻● 1952年（昭和27年）7月～12月	解説：中尾 薫	定価：本体18,000円＋税	ISBN978-4-8433-5482-7
●第40巻● 1953年（昭和28年）1月～6月	解説：岡野 宏	定価：本体18,000円＋税	ISBN978-4-8433-5483-4
●第41巻● 1953年（昭和28年）7月～10月・補遺（『厚生文化』1944年9月他）	解説：岡野宏・前島志保	定価：本体18,000円＋税	ISBN978-4-8433-5484-1

好評発売中

第Ⅰ期・戦前篇 全11巻

揃定価：本体198,000円＋税 ISBN978-4-8433-5088-1 C3370 B5判／上製／クロス装／カバー

■第一回配本■ 全5巻揃定価：本体90,000円＋税 ISBN978-4-8433-5089-8 C3370

1931年（昭和6年）～1934年（昭和9年）

■第二回配本■ 全6巻揃定価：本体108,000円＋税 ISBN978-4-8433-5090-4 C3370

1935年（昭和10年）～1937年（昭和12年）

第Ⅱ期・戦中篇 全13巻

揃定価：本体234,000円＋税 ISBN978-4-8433-5225-0 C3370 A5判・B5判／上製／クロス装／カバー

■第一回配本■ 全6巻揃定価：本体108,000円＋税 ISBN978-4-8433-5226-7 C3370

1938年（昭和13年）1月～1940年（昭和15年）6月

■第二回配本■ 全7巻揃定価：本体126,000円＋税 ISBN978-4-8433-5227-4 C3370

1940年（昭和15年）7月～1944年（昭和19年）

ゆまに書房 〒101-0047 東京都千代田区内神田2-7-6 TEL .03 (5296) 0491 FAX.03 (5296) 0493 http://www.yumani.co.jp/

ゆまに書房 Tel.03(5296)0491／Fax.03(5296)0493 年 月 日

会館芸術 第Ⅲ期 戦後篇・全17巻

・☐ 第1回・全9巻 ・☐ 第2回・全8巻

お名前

ご住所

TEL ()

取 扱 店

※毎度ありがとうございます。お申し込みはぜひ当店へ。

戦前期、関西モダニズム運動を牽引し、中心的役割を果たした総合文化雑誌

會館芸術

第Ⅲ期・戦後篇 全17巻

◆監修◆長木誠司 *CHOKI Seiji*
東京大学大学院総合文化研究科 教授

ヘルマン・ゴチェフスキ *Hermann GOTTSCHESKI*
東京大学大学院総合文化研究科 教授

前島志保 *MAESHIMA Shiho*
東京大学大学院情報学環・東京大学大学院総合文化研究科 准教授

◆編集・解説◆朝日会館・会館芸術研究会

◆協力◆朝日新聞厚生文化事業団 朝日新聞社

◆解説執筆◆（50音順）

岡野 宏
東京大学教養学部教務補佐員

白井史人
名古屋外国語大学講師

中尾 薫
大阪大学大学院文学研究科准教授

中村 仁
桜美林大学・お茶の水女子大学・駒澤大学非常勤講師

前島志保
山本美紀
奈良学園大学教授

監修のことば

長木誠司

東京大学大学院総合文化研究科 教授

ヘルマン・ゴチェフスキ

東京大学大学院総合文化研究科 教授

前島志保

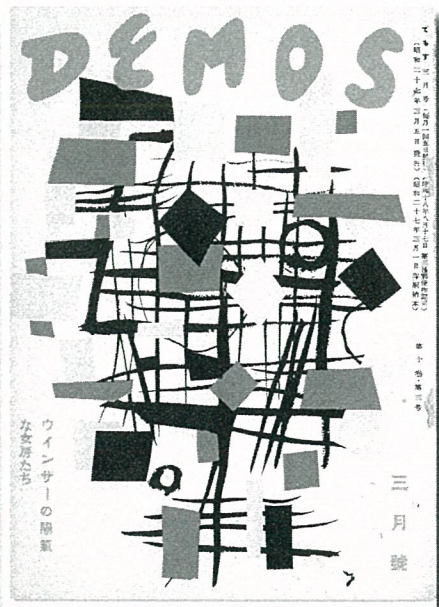
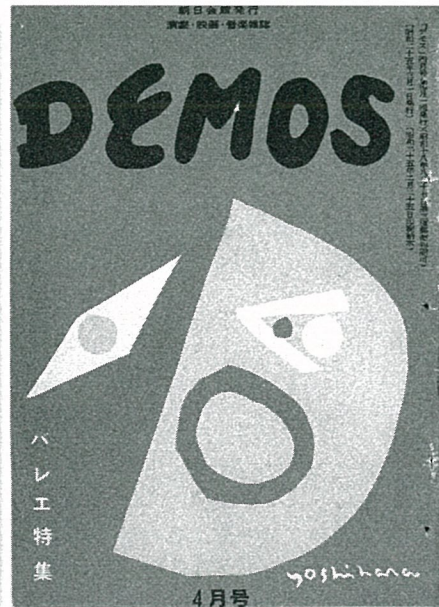
東京大学大学院情報学環・東京大学大学院総合文化研究科 准教授



朝日会館 (出典・株式会社竹中工務店『建築写真帖』昭和二年再版)

朝日会館（以下「会館」）は1926年（大正15年）10月から1962年（昭和37年）10月まで大阪・中之島に存在し、「大阪の文化の中心」「文化の殿堂」と称されていた総合文化施設である。会館は母体の新聞社とは一定の距離を保ちながら、独自の公演、上演、展覧会、講演会など多彩な活動を展開し、関西の近代文化史において重要な役割を果たした。

ここから1931年（昭和6年）に創刊された雑誌が、『会館芸術』（～1953年〈昭和28年〉／全222冊 朝日新聞社会事業団）である。同誌は会館の機関誌として出発したものの、創刊後数年で、音楽、舞踊、演劇、映画、美術、写真の解説・評論記事から、短編・長編小説、国内外の著名人の随想・インタビュー、各国の文化事情の紹介までを盛り込んだ総合文化雑誌に発展した。その後様々に名前や規模を変えつつも1953年（昭和28年）までの長期にわたって発行され、一時期は全国展開も計画されていた『会館芸術』は、同時代の「阪神間モダニズム」とも相通じており、東京一極集中ではない近代日本の文化活動の在り方を示す好例と言える。全集未収録の著名人の作品・評論も多数掲載している本誌は、戦前から戦後にかけての様々な分野の展開に関する貴重な資料でもある。



本文 見本

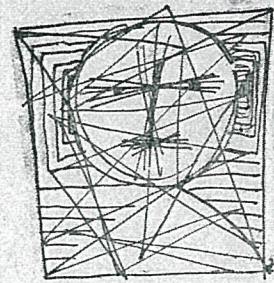
約77%に縮小

「前書き」
歌劇を書きたい。——ということとは、
もともと音楽を始めた時からの宿願であつ
た。
もとより始めは、自分の将来実行した
作曲における多くの仕事の中の一つの
部門としてぐらゐの漠とした考えであつ
たが、勉強と種々な音楽的経験を積みよ
つてからは、かえつてその宿願は
一層強くなり、実際の歌劇の上演につ
き、困難さがわかつて来ただけに、

少々実現の困難な宿願として、胸の中に
隠し込んで置いた外無かつた。疑惑
は、單なる音楽でもなく、又演劇でもな
く、その上わが國には全然といつてもよ
い程傳統の無いこの一種の藝術が如何な
る性質を持ち、又如何なる限界を持つて
いるかといふことを窺ふに以上絶えずと
生れて来たし、実際の舞台につきまとい
ふ種々な困難性は、後に述べるような舞
台とのつながりを自分が持つに至つて、
はじめて遅々と解決される迄はいくら考

へても不可解なことだらけであつた。
数年の間、いつか必ず書くであろう歌
劇のために、歌劇が——新しく生み出
される日本の歌劇が如何なるものである
べきかといふことを考え抜いた。そして
実際の舞台といふものを知るために、あ
らゆる機会をのがさないやうにしようと
した。ようようにして昨年の秋いよいよ歌
劇の作曲にとりかゝる自信がつき「タ
鶴」にかゝるまでには、実に多くの下地
と時間が要つたといふことは我ながら不

思議なほどである。しかしながら実際に
作曲しながら感じたことも又如何にその
下地と時間をかけた準備が強く自分の創
作を進めて行く上に大切なものであつた
かといふことである。
萩原朔太郎はかつてその「雪の」中に
「詩人が理論家でないならならぬわが
國の運命」といふことを述べて
いる。あえて詩人に止まらずすべての創
作的な傳統の稱へるわが國においては、
作家も、詩人も作曲家も、画家も、あら



オペラ「タ鶴」

作曲が出来るまで

団 伊 玖 磨

◆主要記事◆

- 1945年
・朝比奈隆「決戦下の満州楽界」(3・4月号)
・石川純一郎「空襲と都市建築」(3・4月号)
- 1946年
・長口宮吉「天然色写真の話」(8月号)
・土方与志「会館二十年新劇と会館」(10月号)
- 1947年
・食満南北「大阪落語」(3月号)
・田中千代「ファッション・ショウを語る」(4月号)
- 1948年
・村山知義「破戒を芝居にする」(2月号)
・古賀政男「アルゼンチン・タンゴ」(8月号)
- 1949年
・古川緑波「月おくれ映画月旦」(2月号)
・川喜多かしこ「世界映画界の鳥瞰図」(6月号)
- 1950年
・野川香文「ジャズを理解するためには」(6月号)
・須田剋太「絵を始めようとする人へ」(8月号)
- 1951年
・岡本太郎「世界芸術と日本モラル」(2月号)
・大熊信行「現代生活と映画」(7月号)
- 1952年
・植草甚一「映画と想像力の問題」(2月号)
・新藤兼人「シナリオ・ライターの孤独」(7月号)
- 1953年
・黛敏郎「映画音楽家の憂鬱」(1月号)
・太田黒元雄「プロコフィエフ来日の思い出」(5月号)

●「DEMOS」1952年2月号より

本書の特色

- 戦中篇から続く「厚生文化」(1945年1月～4月、10月～11月)と後継誌「会館文化」(1946年1月～1947年6月)、『DEMOS(デモス)』(1947年7月～1952年10月)およびDEMOS改題「会館芸術」(1952年11月～1953年10月・終刊)を収録。
- 最終巻の補遺として「厚生文化」(1944年9月、早稲田大学演劇博物館蔵)を収録。
- 内容は、美術、映画、写真、演劇、舞踊、音楽、文学、評論、国内外の著名人の随想、落語、各国の文化事情の紹介等々、様々な分野にわたる資料の宝庫。
- 全集未収録の作品や評論も多数収録する極めて貴重な資料群である。
- 音楽：藤原義江、朝比奈隆、山田耕作／演劇：千田是也／映画：淀川長治／文学：井伏鱒二、与謝野晶子／美術：藤田嗣治／舞踊：伊藤道郎等々、錚々たる執筆陣による第一級資料。
- 現存するものが極めて少なく、なかなか見ることのできない極めて稀少な雑誌である。
- 各巻巻末に「朝日会館・会館芸術研究会」による詳細な解説を付す。